

技術委員会副委員長を 拝命して

川崎地質（株） 取締役執行役員 北日本支社長
太田 史朗



はじめに

昨年2月に西川貞広の後任として弊社北日本支社長に就任いたしました。また、昨年5月には、平成21年4月から委員として参加させて頂いている技術委員会の副委員長を拝命いたしました。東北地方は震災から今年3月で4年目を迎え、復興事業も調査設計から施工に移行する時期を迎えています。しかし、昨今多発する豪雨災害や今後も起こり得るであろう大地震への備えを図る上で、我々が営む地質調査業が、益々、重要になると認識しています。引き続き、新田委員長および副委員長そして技術委員の方々とともに、本協会そして地質調査業の発展のため、大変、微力ではありますが尽力させて頂きたいと思えます。どうか、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

私の履歴書

広報委員会からの執筆依頼に「人となりをご披露ください」とありました。しかし、東北津々浦々に配信される大地の紙面を汚すことは出来ませんので、多少、脚色しつつ、私の生い立ちから現在までを紹介させて頂きます。

出生から高校卒業まで

出生：昭和48年7月、北海道苫小牧市（母方の実家）

育ち：北海道帯広市（十勝地方の中心、豚丼や六花亭が有名と思います）
中学までは野球部、高校ではテニス部に属しました。部活で養った基礎体力が、今日、大いに役立っています。また、高校では自由奔放の校風に大きな影響を受け、勉学はそこそこに麻雀などのコミュニケーション作法の習得にも力を注ぎました。

大学受験

父から「つぶしがきく理系大学を目指せ」と言われたものの、センター試験の数学得点率は3割、わずかな可能性に希望を持ちつつ、理系大学を複数校受験することになりました。二次試験では多少の手応えを感じていたものの、案の定、私立も含めすべて不合格、予備校の入学手続きを進めることにしました。そして、卒業式も終わり、近所の友人宅で行った「予備校入学壮行－大麻雀大会」の明くる日の朝、人生に一度あるかないかの驚きがあったのです。突然、友人の母にたたき起こされ「某大学から家に電話があったようなので、至急帰りなさい」とのこと、最大限の力を振り絞り、猛ダッシュで帰宅した後、再度の電話に出ると何と「補欠合格」の知らせ、「捨てる神あれば拾う神あり」の故事を初めて体験した出来事でした。

大学生活

何とかすべりこんだ日本で唯一の鉱山学部で4年間を過ごしました。

大学生活では、コミュニケーション作法に更に磨きをかけるべく、引き続き精進しましたが、社会学の一環として取り組んだ、様々なアルバイト（接客業、ビルメンテ、ボイラー整備、家庭教師、店舗改修等々）を経験する中で、世間や社会人の厳しさが多少なりとも実感出来るようになっていました。4年次になると研究室の配属です。「採炭」「採油」「採鉱」「選鉱」の四つの講座から「採鉱（岩盤工学研究室）」を選ぶことにしました。この頃には、地質コンサルの世界に身を投ずる決意が固まっていたのですが、その理由を振り返ると、父や親族の多くが建設業に従事しており土木の世界を身近に感じていたこと、また、幼少より地球の

成り立ちや自然科学に強い興味を抱いていたこと、などがあげられます。大学での研究生生活では、仕事を進める上での教訓を初めて得ることが出来ました。それは、独りよがりの手順で実験結果のとりまとめを行った結果、指導教官から全てやり直しを命じられたことです。修正の後、指導教官からは、「未経験の仕事を行う時は、必ず相談・確認をしながら進めること、同じ間違えを起こすなよ」とのお叱りを受けましたが、この出来事は、その場面は今でも脳裏から離れません。

就職活動

工学系研究室における当時の就職活動は、まだ、教授推薦が大半でしたが、私は就職情報誌を片手に地質コンサル大手の数社に狙いを定め独自に就職活動を行いました。しかし、大学受験同様、ここでも、良い成果が得られず... 前出の指導教官とその友人である当時の弊社技術部次長の取り計らいで、今度は、川崎地質に拾われることになりました。なお、教授からは太平洋炭鉱を進められました。が丁重にお断り申し上げました。

会社生活

入社後、東北支店に配属されましたが、「3年間は極力、不平不満を言わない」「仕事を進める際は、その内容について必ず上長の確認をとる」を心掛けることにしました。入社当時の東北支店は総勢20人程度の事業所でしたが、上司・同僚、そして指南役の官庁OBの方など、非常に頼りになる方々がいらした職場であったことも幸いし、技術力を向上させるべく切磋琢磨しながら仕事に取り組むことが出来ました。現在まで、様々な業務を経験しましたが、ここでは、技術者人生を決定づけた二つの仕事を紹介したいと思います。

○東北新幹線

盛岡～青森間の路線地質調査

→ 入社3年目から従事し、5年間担当しました。入社4年目には、切土中の岩盤地すべり対応を担当しましたが、何せ初めての地すべり業務です、客先に一人で打合せに行った際、数十人いる中で「ちゃんとやってくれ

よ」と大声で怒られるなど、大きな試練となりました。しかし、その後、先輩が合流したことにより挽回に転じ、最後には、お褒めのお言葉を頂く結果となったことで、地質コンサルのやりがい初めて実感しました。

○堤防関連の調査・解析・設計

→ 現在、ライフワークともいえるべき仕事ですが、特に思い出深いのは、平成11年（入社4年目）から平成14年の間に担当した床上浸水対策事業の現場です。築堤材料の土取場調査、軟弱地盤・浸透に関する堤防断面検討、柔構造樋門の軟弱地盤対策工設計を実施した後、プレロード・築堤盛土の施工管理で1年間、同期の社員と二人で現場事務所に常駐しました。そこでは、民間顧客を対象とした技術営業（計画・見積・価格交渉）にも取り組み、様々な経験を積むことが出来ました。多くの失敗もありましたが、その都度、上司・同僚・顧客から助言や叱咤激励を頂き、何とか対応することが出来ました。その後も「現地で見て、考えて、最適な答えを出す」というモットーの元に、豪雨や震災対応の災害復旧（被災調査・復旧設計）、健全度調査・補修設計などの業務経験を重ね、今日に至っております。

おわりに

現在、社会人生活の折り返しとなる年齢に達しましたが、改めて振り返ると、その場面場面で多くの方の指導・助言・協力を頂いたことにより、この業界に身を置くことが出来ているのだと感じております。経営者としてはまだまだ勉強中の身ですが、今後も、会社および業界の諸先輩・同僚・後輩とともに「不可視な地中を明らかにする知識産業」である地質調査業を更に発展させるべく、精進してゆく所存です。改めまして、よろしくお願ひ申し上げます。